8 Y. Masaki et al.

- tion in patients admitted for cardiac emergency. J Cardiol 2010:55:377-83.
- [4] Mair J, Hammerer-Lercher A, Puschendorf B. The impact of cardiac natriuretic peptide determination on the diagnosis and management of heart failure. Clin Chem Lab Med 2001;39:571–88.
- [5] Hildebrandt P, Collinson PO. Amino-terminal pro-B-type natriuretic peptide testing to assist the diagnostic evaluation of heart failure in symptomatic primary care patients. Am J Cardiol 2008;101:25—8.
- [6] Masson S, Latini R, Anand IS, Vago T, Angelici L, Barlera S, Missov ED, Clerico A, Tognoni G, Cohn JN, Val-HeFT Investigators. Direct comparison of B-type natriuretic peptide (BNP) and amino-terminal proBNP in a large population of patients with chronic and symptomatic heart failure: the Valsartan Heart Failure (Val-HeFT) data. Clin Chem 2006;52:1528—38.
- [7] Kragelund C, Grønning B, Køber L, Hildebrandt P, Steffensen R. N-terminal pro-B-type natriuretic peptide and long-term mortality in stable coronary heart disease. N Engl J Med 2005;352:666—75.
- [8] McAlister FA, Ezekowitz J, Tonelli M, Armstrong PW. Renal insufficiency and heart failure: prognostic and therapeutic implications from a prospective cohort study. Circulation 2004;109:1004—9.
- [9] Weber M, Dill T, Arnold R, Rau M, Ekinci O, Müller KD, Berkovitsch A, Mitrovic V, Hamm C. N-terminal B-type natriuretic peptide predicts extent of coronary artery disease and ischemia in patients with stable angina pectoris. Am Heart J 2004;148:612–20.
- [10] Bibbins-Domingo K, Gupta R, Na B, Wu AH, Schiller NB, Whooley MA. N-terminal fragment of the prohormone brain-type natriuretic peptide (NT-proBNP), cardiovascular events, and mortality in patients with stable coronary heart disease. JAMA 2007;297:169—76.
- [11] Moses JW, Leon MB, Popma JJ, Fitzgerald PJ, Holmes DR, O'Shaughnessy C, Caputo RP, Kereiakes DJ, Williams DO, Teirstein PS, Jaeger JL, Kuntz RE, SIRIUS Investigators. Sirolimus-eluting stents versus standard stents in patients with stenosis in a native coronary artery. N Engl J Med 2003;349:1315—23.

- [12] Imai E, Horio M, Watanabe T, Iseki K, Yamagata K, Hara S, Ura N, Kiyohara Y, Moriyama T, Ando Y, Fujimoto S, Konta T, Yokoyama H, Makino H, Hishida A, et al. Prevalence of chronic kidney disease in the Japanese general population. Clin Exp Nephrol 2009;13:621—30.
- [13] Tschöpe C, Kasner M, Westermann D, Gaub R, Poller WC, Schultheiss HP. The role of NT-proBNP in the diagnostics of isolated diastolic dysfunction: correlation with echocardiographic and invasive measurements. Eur Heart J 2005;26: 2277—84
- [14] Martinez-Rumayor A, Richards AM, Burnett JC, Januzzi Jr JL. Biology of the natriuretic peptides. Am J Cardiol 2008;101: 3-8.
- [15] de Lemos JA, McGuire DK, Drazner MH. B-type natriuretic peptide in cardiovascular disease. Lancet 2003;362:316—22.
- [16] Burnett Jr JC. Novel therapeutic directions for the natriuretic peptides in cardiovascular diseases: what's on the horizon. J Cardiol 2006;48:235—41.
- [17] Weber M, Hamm C. Role of B-type natriuretic peptide (BNP) and NT-proBNP in clinical routine. Heart 2006;92: 843-9.
- [18] Anwaruddin S, Lloyd-Jones DM, Baggish A, Chen A, Krauser D, Tung R, Chae C, Januzzi Jr JL. Renal function, congestive heart failure, and amino-terminal pro-brain natriuretic peptide measurement: results from the ProBNP Investigation of Dyspnea in the Emergency Department (PRIDE) Study. J Am Coll Cardiol 2006;47:91—7.
- [19] Bibbins-Domingo K, Ansari M, Schiller NB, Massie B, Whooley MA. B-type natriuretic peptide and ischemia in patients with stable coronary disease: data from the Heart and Soul study. Circulation 2003;108:2987—92.
- [20] Ahluwalia A, MacAllister RJ, Hobbs AJ. Vascular actions of natriuretic peptides Cyclic GMP-dependent and -independent mechanisms. Basic Res Cardiol 2004;99:83—9.
- [21] Omland T, Sabatine MS, Jablonski KA, Rice MM, Hsia J, Wergeland R, Landaas S, Rouleau JL, Domanski MJ, Hall C, Pfeffer MA, Braunwald E, PEACE Investigators. Prognostic value of B-type natriuretic peptides in patients with stable coronary artery disease: the PEACE Trial. J Am Coll Cardiol 2007;50: 205–14.

Please cite this article in press as. Masaki Y, et al. Clinical significance of the measurements of plasma N-terminal pro-B-type natriuretic peptide levels in patients with coronary artery disease who have undergone elective drug-eluting stent implantation. J Cardiol (2011), doi:10.1016/j.jjcc.2011.01.015

動脈硬化と心臓リハビリテーション

Atherosclerosis and cardiac rehabilitation

— From bedside to bench —

島田和典*1.2, 深尾宏祐*1, 大西 崩*2, 西谷美帆*1, 正木克由規*1, 对上奈穗*3, 在上的2005*1, 造出发表数*1, 有出責宏*2, 久米淳美*1, 山下晴世*1, 大坂裕通*1, 蔡 榮 龍 *1, 家崎貴文*4, 多田昇弘*5, 内藤久士*6、代田浩之*1

- *1順天堂大学医学部 循環器内科、*2順天堂大学医学部附属順天堂医院 健康スポーツ室,
- *3 東北大学大学院農学研究科 食品機能健康科学講座。*4 順天堂大学医学部 生理学第二講座。
- *5 順天堂大学大学院 アトピー疾患研究センター、*6 順天堂大学大学院 スポーツ健康科学部

抄 録

動脈硬化性疾患に対する心臓リハビリテーションは、早期離床、社会復帰、危険因子や QOL の改善のみならず、 予後を改善することが明らかにされている。実際に我々も、メタボリックシンドロームを有する冠動脈パイパス術施 行患者に対する回復期心臓リハビリテーションは、除脂肪量を減少させることなく腹囲や脂肪重量を有意に減少、運 動耐容能や脚筋力を有意に増加、高感度 CRP を有意に低下させることを報告した。さらに最近,高齢冠動脈疾患患 者に対する維持期心臓リハビリテーションは、冠危険因子の是正や QOL の改善のみならず、長期予後の改善にも有 効であることを報告した、これらの動脈硬化性疾患に対する心臓リハビリテーションの有効性の機序を明らかにする ために、我々は、動脈硬化モデルマウスを用いて基礎的検討を行った、アポE欠損マウスを、普通食群、高脂肪食 群、高脂肪食+自発運動群に分割し、動脈硬化病変の形成、血管内皮機能、白色および褐色脂肪組織の重量変化、大 動脈および血中の炎症レベルを検討した.高脂肪食により.血管内皮依存性弛緩反応は有意に低下し,動脈硬化性病 変の形成は有意に増加した。自発運動は、血管内皮依存性弛緩反応を保持し,動脈硬化性病変の形成を有意に抑制し た、自発運動により、大動脈組織における炎症性細胞の発現は有意に低下し、血中の炎症性サイトカインやケモカイ ン濃度も有意に低下した。また、白色脂肪重量が減少し、血中アディポネクチン濃度は有意に増加した。さらに、自 発運動と薬物治療(スタチン,アンジオテンシンⅡ受容体拮抗薬)の併用は,自発運動単独または薬物治療単独に比 し、動脈硬化性病変の形成を抑制した、以上より、心臓リハビリテーションの中心の一つである運動療法は、組織お よび血中の炎症を抑制することにより動脈硬化の発症や進展を抑制すること、さらに運動療法と薬物治療を含めた包 括的治療が,動脈硬化の発症や進展を抑制に極めて有用であることが基礎的検討からも示唆された.

〔心臓リハビリテーション(JJCR)16(1):40-43, 2011〕

Key words:動脈硬化、自発運動、アポE欠損マウス、炎症

1. はじめに

動脈硬化性疾患に対する心臓リハビリテーションは、早期離床や社会復帰、危険因子や QOL の改善のみならず、予後を改善することが明らかにされている¹¹、実際に我々も、メタボリックシンドロームを有する冠動脈バイパス術施行患者に対する回復期心臓リハビリテーションは、除脂肪量を減少させることなく腹囲や脂肪重量を有意に減少、運動耐容能や脚筋力を有意に増加、高感度

CRPを有意に低下させることを報告した²¹. さらに最近, 高齢冠動脈疾患患者に対する維持期心臓リハビリテーションは、冠危険因子の是正や QOL の改善のみならず、長期予後の改善にも有効であることを報告した³¹.

以上より、運動が動脈硬化性疾患の予防や治療に有用であることは明らかである⁴. これらの動脈硬化性疾患に対する心臓リハビリテーションの有効性の機序を明らかにするために、我々は、動脈硬化モデルマウスを用いて基礎的検討を行った.

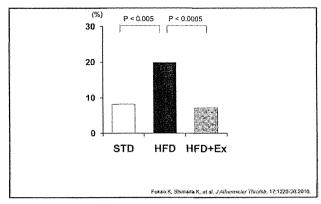


図1 大動脈弁輪部における動脈硬化病変

STD: standard diet, HFD: high fat diet, HFD + Ex: high fat diet + voluntary exercise.

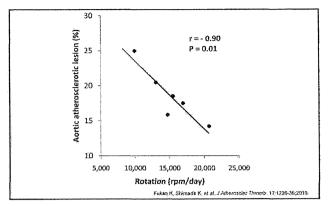


図 2 運動量と動脈硬化病変との関連

2. 動脈硬化モデルマウスを用いた基礎的検討

a) 対象と方法

動物を用いた持久性運動は、強制的運動と自発的運動に分類することができる。これまでの動物モデルを用いた研究では、主にトレッドミルや水泳等の強制運動による評価が行われてきた^{5.60}、夜行性であるマウスに対する日中のトレッドミルによる運動。トレッドミル走行スピード低下時の電気刺激。本来泳がないマウスの溺水に対する過度のストレス。さらにその温水環境など、従来の強制運動を用いた動脈硬化に対する評価には、自律神経や温熱効果等の様々な因子が関与している可能性がある。したがって、今回我々は、自発運動を用いて、動脈硬化に対する運動の効果を検討した。

8週齢雄のアポE欠損マウスを、普通食(STD)群、高脂肪食(HFD)群、高脂肪食 + 自発運動(HFD + Ex)群に分割した。自発運動は、ホイールケージを使用した。それぞれ 10 週間後に、体重、白色および褐色脂肪組織の重量変化、血清脂質を測定した。動脈硬化面積は、SUDAN-IVによる大動脈展開標本および Oil red-O染色による大動脈弁輪部標本を作製し計測した。また、アセチルコリンによる血管内皮機能を解析した。さらに、血中の interleukin(IL)-6、 tumor necrosis factor(TNF)- α 、macrophage chemoattractant protein(MCP)-1、アディポネクチン測定、大動脈より RNA を抽出し、realtime-PCR 法にて遺伝子発現を確認した 7 .

次に、8週齢雄のアポE欠損マウスを、STD群、 HFD 群、HFD + Ex群、高脂肪食+スタチン (HFD + S) 群、高脂肪食+アンジオテンシンⅡ受容体拮抗薬 (HFD + ARB) 群, 高脂肪食 + スタチン + 自発運動 (HFD + S + Ex) 群, 高脂肪食 + ARB + 自発運動 (HFD + ARB + Ex) 群に分割した. 自発運動は, 前 述と同様にホイールケージを使用し8週間行い. 薬物は, 浸透圧ポンプを皮下に挿入し8週間持続投与した. 動脈硬化性変化は, SUDAN-IVによる大動脈展開標本を用いて評価した.

b) 結 果

HFD + Ex 群の10週後の体重は、HFD 群に比し有 意に低値であったが、体重増加率は3群間で有意差を認 めなかった. HFD 群および HFD + Ex 群の血清コレス テロールと very low density lipoprotein コレステロー ルは、STD 群に比し有意に高値であったが、HFD 群と HFD + Ex 群との間には有意差を認めなかった。HFD 群の精巣周囲の白色脂肪重量と総白色脂肪重量は, STD 群に比し有意に高値であった。HFD + Ex 群の精 巣周囲の白色脂肪重量と総白色脂肪重量は、HFD 群に 比し有意に低値であった. HFD 群の大動脈弁輪部およ び大動脈展開標本における動脈硬化面積は、STD 群に 比し有意に高値であった. HFD + Ex 群の大動脈弁輪 部および大動脈展開標本における動脈硬化面積は. HFD 群に比し有意に低値であった (図 1). HFD + Ex 群における1日あたりの運動量は、大動脈展開標本にお ける動脈硬化面積と有意な負の相関を認めた(図2). また、HFD + Ex 群における血管内皮機能は、HFD 群 に比し有意に保持されていた。血中のIL-6、TNF-α、 MCP-1は、STD群に比しHFD群で有意に高値であ り、HFD 群に比しHFD + Ex 群で低値であった(図 3)、アディポネクチンは、HFD 群に比し HFD + Ex 群 で有意に高値であった(図3). 大動脈におけるCD68

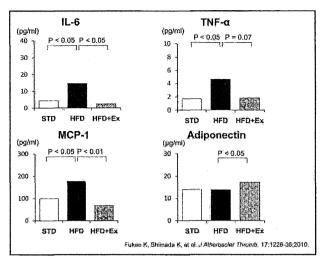


図3 血中サイトカイン・ケモカイン濃度

STD: standard diet, HFD: high fat diet, HFD + Ex: high fat diet + voluntary exercise. IL: interleukin. TNF: tumor necrosis factor, MCP: macrophage chemoattractant protein.

(マクロファージ) CD4 (リンパ球) CD11c (樹状細胞) の発現は、STD 群に比し HFD 群で高値であり、HFD 群に比し HFD + Ex 群で低値であった (図 4)⁷).

HFD + S 群と HFD + ARB 群の大動脈展開標本の動脈硬化病変形成は、HFD 群に比し有意に減少した。さらに、HFD + S + Ex 群の大動脈硬化病変形成は、HFD + S 群および HFD + Ex 群に比し有意に減少した。同様に、HFD + ARB 群および HFD + Ex 群に比し有意に減少した。は、HFD + ARB 群および HFD + Ex 群に比し有意に減少した。

c) 考察

アポE欠損マウスに対する高脂肪食負荷は、総コレ

ステロールも含めた血清脂質を有意に増加、血管内皮依 存性弛緩反応を有意に低下、動脈硬化性病変の形成を有 意に増加させた。同時に、血中の炎症性サイトカインや ケモカインは有意に増加し、大動脈組織におけるマクロ ファージ、リンパ球、樹状細胞の発現は、有意に増加し た. 一方. 同じ高脂肪食負荷を行ったにもかかわらず. 自発運動により血管内皮依存性弛緩反応、動脈硬化性病 変の形成。血中の炎症性サイトカインやケモカイン。大 動脈組織におけるマクロファージ、リンパ球、樹状細胞 の発現は低下した. さらに. 自発運動は. 血中アディポ ネクチンを増加させた。血清総コレステロールは、自発 運動により有意な改善は認められなかったことより、自 発運動による血管内皮機能や動脈硬化病変の改善は. 血 清脂質の改善よりもむしろ大動脈組織および全身の炎症 状態を改善することによりもたらされた可能性が考えら れた、さらに、大動脈硬化病変は、自発的運動量と有意 な負の相関を認めたことは興味深い結果である.

また、スタチンや ARB の投与は、自発運動と同様に大動脈硬化病変の形成を抑制した。スタチンや ARB 投与に自発運動を組合せることは、大動脈硬化病変の形成に対して相加的な効果が期待できる可能性を示した。スタチンや ARB は、心血管イベント発症を有意に減少させることが多くの臨床研究により明らかにされている。両剤は、基礎研究からも抗動脈硬化作用を有することが報告されている。したがって、動脈硬化の遺伝的リスクを有し、さらに食習慣の改善が十分とはいえない状況においても、自発的運動の継続が、抗動脈硬化の観点からも極めて重要であると考えられる。

本研究は、マウスの動脈硬化病変形成を検討してお

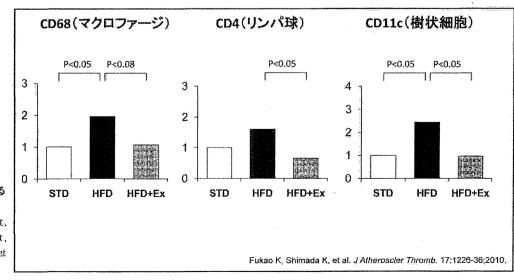


図4 大動脈組織における mRNA発現

STD: standard diet, HFD: high fat diet, HFD + Ex: high fat diet + voluntary exercise. り、ヒトを対象とした臨床研究ではない。マウスとヒトでは、血管径が明らかに異なる。また、炎症性細胞の役割も異なる可能性も考えられる。今後、臨床的検討も含めたさらなる研究が必要である。

3. 結語

心臓リハビリテーションの中心の一つである運動療法は、組織および血中の炎症を抑制することにより動脈硬化の発症や進展を抑制すること、さらに運動療法と薬物治療を含めた包括的治療が、動脈硬化の発症や進展抑制に極めて有用であることが基礎的検討からも示唆された。

汝 就

- 1) Taylor RS, Brown A, Ebrahim S, et al: Exercise-based rehabilitation for patients with coronary heart disease: systematic review and meta-analysis of randomized controlled trials. Am J Med 2004: 116: 682-692.
- 2) Onishi T. Shimada K. Sunavama S. et al : Effects of a

- cardiac rehabilitation in patients with metabolic syndrome after coronary artery bypass grafting. J Cardiol 2009: 53: 381-387.
- 3) Onishi T, Shimada K, Sato H, et al: Effects of phase III cardiac rehabilitation on mortality and cardiovascular events in elderly patients with stable coronary artery disease. Circ J 2010: 74: 709–714.
- 4) Gielen S. Schuler G. Hambrecht R: Exercise training in coronary artery disease and coronary vasomotion. Circulation 2001: 103: E1-E6.
- Bernstein D: Exercise assessment of transgenic models of human cardiovascular disease. Physiol Genomics 2003: 13: 217-226.
- 6) De Bono JP. Adlam D. Paterson DJ, et al: Novel quantitative phenotypes of exercise training in mouse models. Am J Physiol Regul Integr Comp Physiol 2006 (Apr); 290 (4): R926-934.
- Fukao K, Shimada K, Naito H, et al: Voluntary exercise ameliorates the progression of atherosclerotic lesion formation via anti-inflammatory effects in apolipoprotein E-deficient mice. J Atheroscler Thromb 2010 (Dec): 17 (12): 1226-1236.



II. 治療 帰尿病の血管合併症予 防を目指した集学的 リスク管理

蔡 榮龍1,代田浩之2)

1)順天堂大学 医学部環器内科

2)順天堂大学 医学部環器内科 教授

糖尿病は、Framingham Heart Studyを始めとする疫学研究により、心血管疾患において独立した危険因子と認識されるようになった。日本において、糖尿病患者数は年々加速度的に増加しており、その数は約900万人と推計され、耐糖能異常者を合わせると2200万人を超えるといわれている。現在の糖尿病の発症には、生活習慣の欧米化による内臓脂肪の蓄積が強くかかわっている。内臓脂肪の蓄積はインスリン抵抗性を惹起し、その結果メタボリックシンドロームとなる。このように肥満症を背景としたメタボリックシンドロームの増加は、冠危険因子の重積を合併した2型糖尿病患者を増加させている。糖尿病の血管合併症では、網膜症、腎症、神経症の細小血管合併症に加えて、冠動脈疾患や脳血管疾患、末梢動脈疾患の大血管合併症が注目され、糖尿病患者は非糖尿病患者と比較して心血管合併症の発症率は2~4倍になるといわれている。これらの血管合併症の抑制、健康寿命の延長、そして生活の質を維持することが、糖尿病治療へのゴールと考えられる。

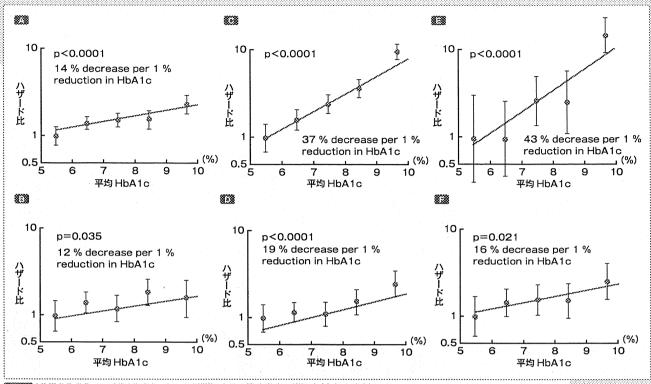
現在,日本人糖尿病患者の血管合併症による死亡は約26.8%であり,腎不全を除いた心血管疾患と脳卒中での死亡率は約20%と報告されている¹⁾. 一方,米国では,糖尿病患者の心血管イベントによる死亡率は50~80%といわれている.このように,最大死因となりうる心血管イベントへの対策が求められており,本稿では,リスクが重積した糖尿病患者に対する血管合併症の予防戦略を概説する.

糖尿病と血管合併症

糖尿病では、高血糖とインスリン抵抗性を背景として、酸化ストレスの亢進や血管内皮機能の障害などにより動脈硬化が促進しやすい状態にある。欧米の報告では、糖尿病患者は冠動脈疾患の既往がなくとも、冠動脈疾患の既往がある非糖尿病患者と同等の心血管イベント発症率で

あるが²⁾, 2型糖尿病患者に対しての厳格な血糖コントロールが心血管疾患や総死亡のリスクを軽減するかについては明確な結論が出ていない.

これまでUnited Kingdom Prospective Diabetes Study (UKPDS)を始めとする大規模臨床試験により、厳格な血糖コントロールが細小血管合併症に対して抑制効果を示すことは繰り返し証明されている。しかし、心血管疾患や脳卒中などの大血管合併症においては、必ずしも厳格な血糖コントロールは抑制効果を示していない。VADT試験



総図を繋じドアDS 36におけるHbA1cの:%UYによるm後合併接の終制率(文献名談談)A:致死性/非致死性心筋梗塞/B:致死性/非致死性脳卒中/C:細小血管症/D:白内障摘出術/E:末梢血管疾患による下肢切断あるいは死亡/F:心不全/※縦軸のハザード比は対数表示

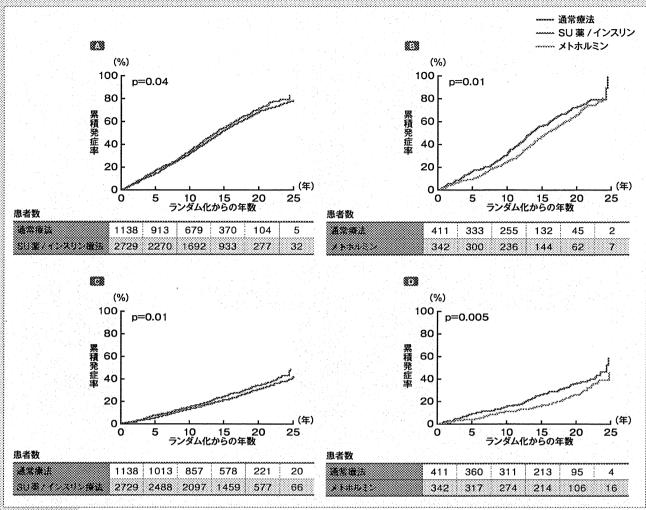
やADVANCE試験では、通常療法群よりも厳格な血糖コントロールが大血管合併症を抑制したとは証明されず^{3,4)}、ACCORD試験では、厳格な血糖コントロールは、通常療法群と比較してむしろ総死亡率を増加させる結果となった⁵⁾. これには、強化療法群において低血糖や体重増加の問題があり、厳格な血糖コントロールだけでは糖尿病の血管合併症予防は不十分である可能性が示唆された。

一方, UKPDS 35では、HbA1cの上昇に伴って心血管疾患の発症リスクが増加し、HbA1cを1%低下させることで心筋梗塞の発症を14%、脳卒中の発症を12%抑制した⁶⁾(緩緩緩). これにより、厳格な血糖コントロールが大血管合併症をある程度は抑制できる可能性が示された. さらに、UKPDS 33終了後に、10年間の追跡調査として行われたUKPDS 80⁷⁾ においては、新規糖尿病患者に対して厳格な血糖コントロールを行った強化療法群では、その後通常療法を行ったとしても、長期予後において全死亡、心筋梗塞の発症が抑制される結果となった。また、それと同時に、肥満の糖尿病患者への薬物療法としてメトホルミンが、心血管イベントの抑制に非常に有効であることも

示された(※※※※》). すなわち、糖尿病と診断されて早期に 厳格な血糖コントロールを行うことで細小血管合併症の抑制のみならず、大血管合併症の抑制効果が長期持続する と考えられ、現在のlegacy effect (遺産効果)という概念を確立することとなった。また、最近行われた大規模臨床 試験 である UKPDS、PROactive、ACCORD、VADT、ADVANCEのメタ解析では、脳卒中では有意差は認められなかったが、冠動脈疾患や心筋梗塞を厳格な血糖コントロールが抑制することが示された⁸⁾.

また、1型糖尿病患者を対象としたDCCT試験でも、インスリン強化療法群が1次予防として細小血管合併症を抑制、2次介入としてその進展を抑制した。さらにDCCTの追跡観察研究として行われたEDICでは、終了するまでの平均17年間の追跡が行われた。心血管イベントは42%抑制され、MACE(心血管死、非致死的心筋梗塞、脳梗塞)では57%の抑制を認めた⁹. これはDCCTでの平均65年の厳格な血糖コントロールが記憶され、後の血管合併症を抑制することを確認する結果となり、metabolic memory などと呼ばれるようになった。これはlegacy

月刊糖尿病 2011/12 Vol.3 No.13 ※ 97



MFP2(MPDS 30におけるfegacy effectとメトカルミンによる心態凝凝抑制効果(文盤7)

A。B:糖尿病関連エンドポイント(A:SU薬/インスリン/B:メトホルミン)/C,D:心筋梗塞(C:SU薬/インスリン/D:メトホルミン)

effect とほぼ同様の現象と考えられている.

また、治療開始時期も、非常に重要な要素となることが注目されている。糖尿病は高血糖のみではなく、危険因子が複数存在する場合が多いため、早期より動脈硬化が進行するケースが少なくない。実際に、急性心筋梗塞で搬送された患者の70%が糖尿病、もしくは耐糖能異常であるとの報告もあり 10, 耐糖能異常や空腹時血糖異常である境界型からの介入治療が求められている。日本人を対象としたFunagata Studyでも、食後高血糖が大血管症の重要な危険因子であることが示されており 11, α グルコシダーゼ阻害薬やグリニド薬により、食後高血糖の改善が血管合併症の抑制につながると期待されている。

薬物療法ついて、SU薬は一般的な血糖降下薬として古

くより使用されている。しかし、UGDP研究において、SU 薬は潜在的心血管系有害作用を有する可能性が示唆され た¹²⁾. 以降、とくに心筋虚血プレコンディショニングの概念 が生まれてからは、冠動脈疾患の既往がある患者に対して SU薬の使用を懸念する意見もあったが、第3世代SU薬で はその点が改善され、冠動脈への影響はないとされている。

現在は、使用において論議が分かれるところではあるが、 チアゾリジン薬による介入を行ったPROactive 試験では、 投与群において大血管合併症の抑制を認めている¹³⁾.こ れはチアゾリジン薬の抗炎症硬化やアディポネクチン上昇効果、膵β細胞の保護作用などの多面的な効果が、動脈硬化の進展を抑制しているとの報告もある¹⁴⁾.

現在、インクレチン関連薬として、DPP-4阻害薬やGLP-1



T T B

	冠動脈疾患	6 24
Japan Diabetes Complications Study (JDCS)	9.6	7.5
	男性 11.2	男性 8.5
	女性 7.9	女性 6.6
日本人一般住民主学ル(久山町研究)	男性 3.5	男性 5.3
	女性 1.8	女性 3.9
UKPDS 32-FD-76	17.4	5.0
治療介入	14.7	5.6

劉王陽 田本人の2岁親家義義等における心は答念器、第今中の免疫展子(JDC9) (2数15 b发)

**************************************		**************************************	
	注註	男性	文性
心血管疾患	LDL-C (p<0.0001)	LDL-C (p<0.001)	TG (p<0.01)
	TG (p<0.0001)	TG (p<0.01)	糖尿病羅病期間(p=0.01)
	HbA1c (p=0.04)	喫煙(p=0.02)	
		HbA1c (p=0.04)	
脳卒中	収縮期血圧(p=0.02)	収縮期血圧(p=0.04)	
腦卒中 and/or 心血管疾患	LDL-C (p<0.0001)	LDL-C (p<0.0001)	収縮期血圧(p=0.02)
	TG (p<0.0001)	TG (p<0.0001)	TG (p<0.0001)
	収縮期血圧(p=0.02)	喫煙(p=0.02)	
	HbA1c (p=0.04)		
	· 喫煙(p=0.02)		

受容体作動薬が新しい治療薬として注目されている。GLP-1 受容体作動薬は血管内皮機能の改善や膵 β 細胞のアポトーシス抑制による膵保護作用が報告されており、今後の臨床データによるエビデンスの集積が期待されている。

糖尿病と高血圧症

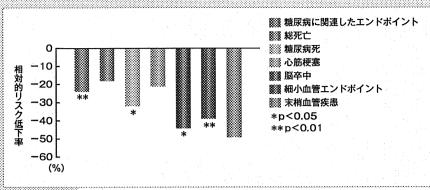
Japan Diabetes Complications Study (JDCS) の登録患者において、脳卒中の年間発症率は1000人あたり7.5人であり¹⁵⁾、一般住民モデルとされている久山町研究と比較して約1.5倍の発症率であった(※※※※). また、UKPDSのデータと比較して、日本人の糖尿病患者における脳卒中の発症率は高いことが示された.

脳卒中の最大の危険因子は高血圧であるが、JDCS登録患者の最大の危険因子も収縮期血圧である(※※※). 高血圧症を合併した2型糖尿病患者を対象に厳格な血圧管理と緩やかな血圧管理を比較したUKPDS 38では、厳格な血圧管理群の血圧は平均144/82 mmHgであり、緩やかな血圧管理群の血圧は平均154/87 mmHgであった。 厳格管理(強化療法)群は緩やかな血圧管理(通常療法)群と比較して有意な血圧低下が認められ、脳卒中を44%抑制した¹⁶⁾(※※※※). ACCORD BP試験においても、収縮期血圧120 mmHg未満の群は、140 mmHg未満の集団と比較して脳血管疾患の発症率を抑えた結果となっている¹⁷⁾. 脳卒中の合併を抑制するには、厳格な血圧コントロールが必要不可欠である。

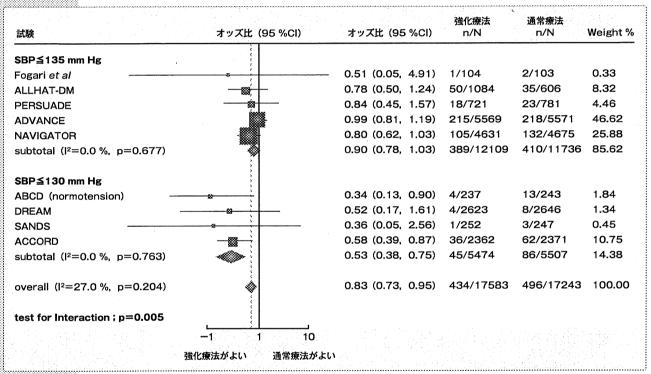
日本高血圧学会の『高血圧ガイドライン 2009』によると、 日本の糖尿病合併高血圧の降圧目標は130/80 mmHg 未満である。Bangalore らのメタ解析では、耐糖能異常、 空腹時血糖異常を含めた2型糖尿病患者において、収縮 期血圧135 mmHgまで降圧させると脳卒中の発症率は下 がり、130 mmHg未満になるとより顕著に抑制効果が認 められた(※※※※)、降圧目標を達成するための治療が求め られる¹⁸⁾。

薬物治療においては、臓器保護作用やインスリン抵抗性の改善作用を目的としたレニン・アンジオテンシン系抑制薬であるACE阻害薬、あるいはアンジオテンシンⅡ受容体拮抗薬(ARB)を第1選択とし、確実な降圧作用を重視してCa拮抗薬やサイアザイド系利尿薬を第2選択としている。糖尿病患者の高血圧は治療抵抗性であること

月刊糖尿病 2011/12 Vol.3 No.13 ※ 99



糖尿病に関連したエンドポイント:突然死,心筋梗塞,脳卒中,腎不全,失明など



2023 (2008)

が多く、複数の降圧薬を併用するケースは少なくない. ACCOMPLISH 試験では、ACE 阻害薬の併用薬として、 利尿薬よりもCa拮抗薬を併用した群において、心血管疾 患による死亡・発症が20 %抑制されたと報告している¹⁹⁾.

糖尿病と脂質異常症

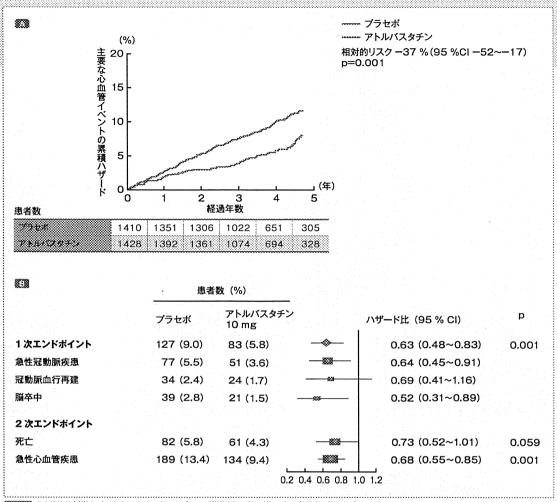
JDCSによると、冠動脈疾患の発症率は1000人あたり

高い結果であり、日本において注目されるべき結果である。 また、女性と比較して、男性は1.5倍程度高い結果であった. 近年、内臓脂肪蓄積を主体としたメタボリックシンドロー ムが周知されてきた。メタボリックシンドロームを背景とし

年間9.6人であり、脳卒中の発症リスクとほぼ同等かやや

た糖尿病患者の多くは、脂質異常症や肥満などの他の危 険因子を多く持っており、これらは心血管のリスクをさら に上げることが知られている。IDCSの結果では、冠動脈 疾患の危険因子としてLDLコレステロールとTGに加えて HbA1cが関与していた。つまり、心血管疾患の合併は脂





数回転 CAPOSは映におけるアトルバスタチンの初始制度器・製革中の知動的器(文献2:改数)

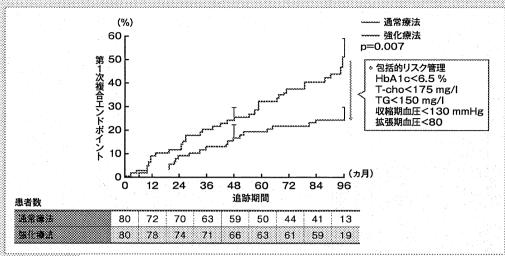
質と血糖値の管理が重要なポイントであることが示された。

心血管疾患発症の抑制を行ううえで、スタチン製剤は 最もエビデンスを確立した薬剤である. Heart Protection Study (2003) では、糖尿病の有無にかかわらず、スタチ ンによるLDLコレステロール低下療法が心血管イベントを 抑制することが示された20) 糖尿病患者においても、大 血管合併症の抑制の脂質介入には、LDL コレステロール の低下を目標に介入することが一般的となった。また、2 型糖尿病患者を対象にHMG-CoA 還元酵素阻害薬の心血 管イベント1次予防効果を検討したCARDS試験では、ア トルバスタチン10 mg/日を介入することで、LDLコレス テロールを40%低下させることが示された。 プラセボ群と 比較して、心筋梗塞の発症を早期より抑制することがで き, また, 脳卒中の発症も抑制された²¹⁾ (※32%). 本来,

LDLコレステロールは脳卒中において重大な危険因子とは いえないにもかかわらず抑制効果が得られたことは、スタ チンによる脂質治療介入の広範囲の可能性を示したもの と考えられる.

また、JDCSでも示されたとおり、LDLコレステロール の次にトリグリセリド(TG)も非常に重要な危険因子であ ることは、CARDS試験で抑制しきれなかった約60%の 心筋梗塞例を抑制するためのさらなる介入方法となる可 能性がある、PERISCOPE 試験では、ピオグリタゾン投与 群においてTG/HDL比が是正され、プラークの進行抑制 効果が得られている²²⁾. LDLコレステロールだけではなく, TGの改善が、イベント抑制にかかわっている可能性もあ る。TGへの治療として、FIELD研究においては、2型糖 尿病患者を対象にフェノフィブラートの有用性を検討した

月刊糖尿病 2011/12 Vol.3 No.13 ※ 101



■ 15 (1880年) 経験における、智能的リスク管理による部外向管合業を、大会管合併業の仲制物業(文献24枚案)

結果、冠動脈イベントでは有意差を示すことはできなかっ たが、全心血管系イベントではフィブラート投与群が有意 にリスクを減少させることが示されている²³⁾.

おわりに

糖尿病患者において血管合併症を抑制するためには、 Steno-2試験²⁴⁾ で示されたような血糖値・脂質・血圧に 加えて、喫煙や肥満などの集積した危険因子に対しての 包括的な介入が求められている (※※※※). 今まで述べたよ うに、薬物療法は非常に重要であるが、運動療法や食事 療法を基軸とした生活習慣の改善や肥満を起こさせない 健康生活の指導が基本であることを忘れてはならない. 現 在進行中であるJ-DOIT3では、血糖値、血圧、LDLコレ ステロールや TG を食事療法と運動療法を重視しており、 緩徐に血糖値をコントロールしていく本試験のプロトコール は、低血糖・体重を増加させない安全な治療法を確立す るための手助けとなるであろう.

- 1) 堀田 饒. 糖尿病、2007;50:47-61.
- 2) Haffner SM et al., N Engl J Med. 1998; 339: 229-34.
- 3) ADVANCE Collaborative Group, N Engl J Med. 2008; 358: 2560-72.
- 4) Duckworth W et al., N Engl J Med. 2009; 360: 129-39.
- 5) ACCORD Study Group, N Engl J Med. 2008; 358: 2545-59.
- 6) Stratton IM et al., BMJ. 2000; 321: 405-12.
- 7) Holman RR et al., N Engl J Med. 2008; 359; 1565-76.
- 8) Ray KK et al. Lancet, 2009: 373: 1765-72.
- 9) Nathan DM et al., N Engl J Med. 2005; 353: 2643-53.
- 10) Norhammar A et al., Lancet. 2002; 359: 2140-4.
- 11). Tominaga M et al., Diabetes Care. 1999; 22: 920-4.
- 12) Seltzer HS, Diabetes. 1972; 21: 976-9.
- 13) Dormandy JA et al., Lancet. 2005; 366:1279-89.
- 14) Kubota N et al. J Biol Chem. 2006: 358: 8748-55.
- 15) 曾根博仁。脈管学。2010;50:523-31。
- 16) UKPDS Group, BMJ. 1998; 317: 703-13.
- 17) The ACCORD Study Group, N Engl J Med. 2010; 362: 1575-85.
- 18) Bangalore S et al., Circulation. 2011; 123: 2799-810.
- 19) Jemerson K et al., N Engl J Med. 2008; 359: 2417-28.
- 20) Collins R et al., Lancet, 2003; 361; 2005-16
- 21) Colhoun HM et al., Lancet. 2004; 364: 685-96.

- 22) Bell DS et al., J Am Coll Cardiol. 2011; 58: 778.
- 23) Keech A et al., Lancet. 2005; 366: 1849-61.
- 24) Gaede P et al., N Engl J Med. 2003; 348; 383-93.

Profile

蔡 榮龍 (さい えいりゅう)

2005年 東京医科大学 医学部 卒業

2007年 独立行政法人機構 鹿児島医療センター 勤務

順天堂大学 循環器内科学講座 入局, 現在に至る

代田浩之 (だいだ ひろゆき)

順天堂大学 医学部 卒業, 虎の門病院 内科, 米国メイヨー クリニック 留学、順天堂大学 内科 講師を経て、

2000年 順天堂大学 医学部 循環器内科 教授

順天堂大学医学部附属順天堂医院 ハートセンター長 (併任)

2008 # 順天堂医院 副院長 (併任),順天堂大学大学院 医学研究 科 スポートロジーセンター 副センター長 (兼任), 現在

Respiratory Physiology & Neurobiology 178 (2011) 275-282



Contents lists available at ScienceDirect

Respiratory Physiology & Neurobiology

journal homepage: www.elsevier.com/locate/resphysiol



Effects of prolonged expiration breathing on cardiopulmonary responses during incremental exercise

Takuya Matsumoto^a, Takashi Masuda^{a,b,*}, Kazuki Hotta^a, Ryosuke Shimizu^a, Akira Ishii^a, Toshiki Kutsuna^a, Kazuya Yamamoto^a, Miyako Hara^a, Naonobu Takahira^b, Atsuhiko Matsunaga^b

a Department of Angiology and Cardiology, Kitasato University Graduate School of Medical Sciences, 1-15-1 Kitasato, Minami-ku, Sagamihara, Kanagawa 252-0373, Japan

ARTICLE INFO

Article history: Accepted 29 June 2011

Keywords: Prolonged expiration Breathing mode Cardiopulmonary responses Autonomic nervous activity Incremental exercise

ABSTRACT

This study was designed to clarify the effects of breathing with prolonged expiration on cardiopulmonary responses and autonomic nervous activity during incremental exercise. Eleven healthy men were randomly assigned to breathing mode: a prolonged expiration breathing with a 2-s inspired time and 4-s expired time and a spontaneous breathing without any constraints. Oxygen uptake (\dot{V}_{02}), ventilation efficiency (\dot{V}_E/\dot{V}_{CO_2}) and rate pressure product were measured. Low- (LF) and high-frequency (HF) components of blood pressure and heart rate variability were analyzed to assess sympathetic and parasympathetic nervous activities, respectively. \dot{V}_E/\dot{V}_{CO_2} , rate pressure product and LF were significantly lower, and \dot{V}_{O_2} and HF were significantly higher during exercise with prolonged expiration than with spontaneous breathing. Striking effects of prolonged expiration breathing included the improvement of ventilation efficiency, the suppression of sympathetic nervous activity and the activation of parasympathetic one during incremental exercise. Furthermore, prolonged expiration breathing may have suppressed the exercise-induced increase in myocardial \dot{V}_{O_2} .

© 2011 Elsevier B.V. All rights reserved.

1. Introduction

The breathing technique of decreasing respiratory frequency (f_R) and increasing tidal volume (V_T) reportedly suppresses sympathetic nervous activity and activates parasympathetic nervous activity (Bernardi et al., 1998; Goso et al., 2001). Although many studies have demonstrated an interaction between breathing technique and autonomic nervous activity as assessed by heart rate and blood pressure variability (Bartels et al., 2004; Bloomfield et al., 2001; Cottin et al., 1999; Pöyhönen et al., 2004; Sanderson et al., 1996), few have documented the effects of breathing mode on cardiopulmonary responses during exercise. Our prolonged expiration breathing technique, involving 2-s inspired time (T_I) and 4-s expired time (T_E) , capitalizes on the suppression of parasympathetic nervous activity during inspiration and its respective activation during expiration (Hayano et al., 1994a,b), which occurs concurrently with suppression of sympathetic nervous activity during expiration (Seals et al., 1993). We previously reported that prolonged expiration breathing enhances parasympathetic ner-

1569-9048/\$ – see front matter © 2011 Elsevier B.V. All rights reserved. doi:10.1016/j.resp.2011.06.025

vous activity and suppresses heart rate elevation in healthy young volunteers in comparison to breathing with a 3-s $T_{\rm I}$ and 3-s $T_{\rm E}$ or spontaneous breathing during exercise with a moderate workload (Matsumoto et al., 2008). It is known that heart rate and blood pressure are excessively elevated during exercise in patients with acute myocardial infarction or chronic heart failure in whom sympathetic nervous activity is increased and parasympathetic nervous activity is weakened, resulting in decreased exercise tolerance (Goldsmith et al., 2000; Rosenwinkel et al., 2001; Matsunaga et al., 2004). Therefore, we hypothesized that prolonged expiration breathing during exercise would enhance parasympathetic nervous activity and enable safe exercise therapy without excessively elevating heart rate or blood pressure. However, the effects of prolonged expiration breathing on cardiopulmonary responses and autonomic nervous activity as exercise intensity changes are largely unknown. Exercise is prescribed at a variety of intensities for patients with cardiopulmonary disease according to their condition. To develop a clinically applicable exercise program using prolonged expiration breathing, it is necessary to assess how this technique affects cardiopulmonary responses and autonomic nervous activity in increments from low exercise intensity to the maximum exertion.

We hypothesized that prolonged expiration breathing would enhance parasympathetic nervous activity and decrease sympathetic nervous activity during incremental exercise, resulting in the

b Department of Rehabilitation, Kitasato University School of Allied Health Sciences, 1-15-1 Kitasato, Minami-ku, Sagamihara, Kanagawa 252-0373, Japan

^{*} Corresponding author at: Department of Rehabilitation, Kitasato University School of Allied Health Sciences, 1-15-1 Kitasato, Minami-ku, Sagamihara, Kanagawa 252-0373, Japan. Tel.: +81 42 778 9699; fax: +81 42 778 9709.

E-mail address: tak9999@med.kitasato-u.ac.jp (T. Masuda).

Table 1 Participants' charcteristics.

Participants	Age (years)	Height (cm)	Weight (kg)	BMI (kg/m²)	Peak \dot{V}_{0_2} (mL/min/kg)		Peak work rate (W)	
					Spontaneous breathing	Prolonged expiration	Spontaneous breathing	Prolonged expiration
1	22	176	68	22.0	40.4	43.5	218	210
2	23	182	78	23.5	38.5	45.2	208	230
3	20	168	60	21.3	36.8	38.1	192	202
4	22	185	72	21.0	42.3	42.9	234	238
5	21	175	63	20.6	38.3	38.6	212	214
6	24	171	58	19.8	37. 5	37.5	196	196
7	22	165	55	20.2	35.3	36.2	188	194
8	22	169	57	20.0	37.6	38.0	196	204
9	22	174	63	20.8	38.9	41.2	210	216
10	24	180	72	22.2	39.7	43.3	212	226
11	23	173	65	21.7	38.8	39.3	208	214
Means ± SEM	22.1 ± 0.4	174.6 ± 1.9	64.8 ± 2.2	22.1 ± 0.3	38.6 ± 2.0	$40.3\pm2.4^{\dagger}$	204.8 ± 6.8	213.6 ± 7 .

SEM: standard error; BMI: body mass index; \dot{V}_{0_2} : oxygen uptake.

suppression of excessive heart rate and blood pressure elevation, in comparison to spontaneous breathing in healthy young volunteers. Therefore, this study was designed to investigate the effects of prolonged expiration breathing on cardiopulmonary responses and autonomic nervous activity during incremental exercise in healthy young volunteers.

2. Methods

2.1. Participants

The study participants were 11 healthy young men. Participant characteristics are presented in Table 1. The study protocol was approved by the Ethics Committee of Kitasato University, and informed consent was obtained from each participant after a detailed explanation of the study protocol. All participants volunteered to participate in the study, and none of the volunteers received monetary compensation. Participants were excluded if they had a history of smoking, cardiopulmonary disease or motor dysfunction due to orthopedic or central neurological disease. The participants were instructed to maintain their usual sleep patterns, refrain from exercise, and abstain from caffeine and other autonomic stimulants for 2 days before the study. The study was performed between 14:00 and 17:00 in an air-conditioned room kept at 23–25 °C and 40–60% humidity.

2.2. Study design

This study employed a randomized, cross-over design. Participants were randomly assigned to groups performing controlled breathing with prolonged expiration first or spontaneous breathing first. For prolonged expiration breathing, they were instructed to breathe with a 2-s $T_{\rm I}$ and 4-s $T_{\rm E}$ at 10 breaths/min from the lightest to the heaviest possible workload the incremental exercise progression. The participants were instructed to watch the $T_{\rm I}$, $T_{\rm E}$ and $T_{\rm E}/T_{\rm I}$ displayed on a gas analyzer monitor (AE300S, Minato, Osaka, Japan). In addition, they maintained the breathing at approximately a 1:2 ratio of $T_{\rm I}$ to $T_{\rm E}$ until the endpoint of incremental exercise, even if they experienced difficulty maintain a 2-s $T_{\rm I}$ and 4-s $T_{\rm E}$. The participants practiced prolonged expiration breathing several times before the study and were supervised by an instructor during incremental exercise. For the spontaneous breathing, they were instructed to breathe without constraint throughout incremental exercise. The incremental exercises with prolonged expiration breathing or spontaneous breathing were performed at the same time on 2 consecutive days.

2.3. Study protocol

Incremental symptom-limited cardiopulmonary exercise testing was performed using a recumbent cycle ergometer (Strength-Ergo. 240, Mitsubishi Electric Engineering, Tokyo, Japan) according to a ramp protocol. After resting for 15 min on the recumbent cycle ergometer, participants started exercise at 10 watts (W) and 50 revolutions per minute of pedaling for 3 min as a warm-up period. Next, the exercise was performed with a workload increase of 1 W every 3 s (20 W/min) until the endpoint of cardiopulmonary exercise testing, followed by a 3-min cool-down period at 10W and finally a 5-min recovery period. The endpoint of cardiopulmonary exercise testing was determined according to the criteria of the American College of Sports Medicine (Kelsey, 2001). That is, the cardiopulmonary exercise testing was finished when the participants could not continue pedaling at 50 revolutions or more per minute, or when they were physically exhausted or complained of severe dyspnoea or dizziness.

2.4. Cardiopulmonary responses

The T_I , T_E , T_E/T_I , f_R , V_T , expired ventilation (\dot{V}_E), oxygen uptake $(\dot{V}_{\rm O_2})$, carbon dioxide output $(\dot{V}_{\rm CO_2})$, and ventilatory equivalents for $\dot{V}_{\rm O_2}(\dot{V}_{\rm E}/\dot{V}_{\rm O_2})$ and $\dot{V}_{\rm CO_2}(\dot{V}_{\rm E}/\dot{V}_{\rm CO_2})$ were measured with a breathby-breath method using a gas analyzer throughout the study. The average values were computed every 10 s. $\dot{V}_{\rm O_2}$ and work rate were used as parameters of aerobic capacity (Wasserman et al., 2005). The anaerobic threshold was calculated from $\dot{V}_{\rm O_2}$ and $\dot{V}_{\rm CO_2}$ using the V-slope method (Koike et al., 2002). The ratio of \dot{V}_{E} increase to \dot{V}_{CO_2} increase ($\dot{V}_{\text{E}}/\dot{V}_{\text{CO}_2}$ slope) was calculated by least-squares linear regression using \dot{V}_E and \dot{V}_{CO_2} measured from the beginning of incremental exercise to the respiratory compensation point (Wasserman et al., 2005). The \dot{V}_E/\dot{V}_{O_2} , \dot{V}_E/\dot{V}_{CO_2} and \dot{V}_E/\dot{V}_{CO_2} slope were used as parameters of ventilation efficiency (Koike et al., 2002; Wasserman et al., 2005). The delta \dot{V}_{0_2} /delta work rate was calculated by leastsquares linear regression using the delta $\dot{V}_{\mathrm{O_2}}$ and delta work rate measured from 1 min after the beginning of incremental exercise to the anaerobic threshold (Toyofuku et al., 2003). The \dot{V}_{0_2} /work rate and delta \dot{V}_{0a} /delta work rate were used as parameters of exercise efficiency (Wasserman et al., 2005). Percutaneous oxygen saturation (Sp_{0_2}) was continuously monitored using a pulse oximeter (PULSOX®-Me, Nihon Kohden, Tokyo, Japan) throughout the study.

The heart rate, and systolic and diastolic blood pressures were recorded continuously throughout the study using a Holter electrocardiogram (FM-120, Fukuda Denshi, Tokyo, Japan) and a finger sphygmomanometer (Finometer, Finapres Medical System BV, The

 $^{^{\}dagger}$ P<0.05 vs. spontaneous breathing.

Netherlands), respectively. The rate pressure product was calculated from heart rate multiplied by systolic blood pressure as a parameter reflecting myocardial $\dot{V}_{\rm O_2}$ (Nelson et al., 1974; Gobel et al., 1978).

2.5. Heart rate variability and blood pressure variability

Offline beat-to-beat analyses of the digitized Holter electrocardiogram and Finometer signals were performed at a temporal resolution of 1 ms. Time series of successive beats were extracted for R-R intervals and beat-to-beat intervals. Occasional ectopic beats were corrected by linear interpolation of adjacent normal beats (Task Force of the European Society of Cardiology and the North American Society of Pacing and Electrophysiology, 1996). Any significant trends were removed by subtraction of the best polynomial function fitted to the data using low-pass filtering. Heart rate and blood pressure variability were analyzed by the maximum entropy method using MemCalc (MemCalc/TARAWA, GMS, Tokyo, Japan) to obtain the power spectra of the low-frequency (LF; 0.04-0.15 Hz) and high-frequency (HF; 0.15-0.4 Hz) components. The power spectrum of the HF component of heart rate variability is used as a parameter reflecting cardiac parasympathetic nervous activity (Task Force of the European Society of Cardiology and the North American Society of Pacing and Electrophysiology, 1996), while that of the LF component of blood pressure variability indicates vascular sympathetic nervous activity (Baselli et al., 1986; Laitinen et al., 1999). The LF/HF ratio in heart rate variability indicates the predominance of sympathetic nervous activity (Task Force of the European Society of Cardiology and the North American Society of Pacing and Electrophysiology, 1996). The LF, HF and LF/HF ratio in heart rate and blood pressure variability were analyzed at 10-s intervals for this study protocol.

2.6. Rating of perceived exertion

The rating of perceived exertion was assessed every minute throughout the study according to the Borg scale (Noble et al., 1983).

2.7. Statistical analysis

All resting and warm-up parameters are shown as mean values measured during the 15-min resting period and 3-min warmup period, respectively. The parameters measured at rest were adopted as baseline values. The f_R , V_T , V_E , T_E , T_E/T_I and Sp_{O_2} measured during incremental exercise are shown as mean values calculated every quarter of the individual's particular exercise time period from initiation to endpoint. The other parameters measured during incremental exercise are shown as mean values calculated every tenth of the individual's particular exercise time period from initiation to endpoint. Two-way analysis of variance for repeated measures (3 time courses of rest, warm-up and exercise vs. 2 breathing techniques) were used to analyze differences in cardiopulmonary responses and autonomic nervous activity between the prolonged expiration and spontaneous breathing modes. If an F ratio was significant, differences in cardiopulmonary responses and autonomic nervous activity between the prolonged expiration and spontaneous breathing modes were assessed using the paired t-test. All values were expressed as means ± standard error and a P value less than 0.05 was considered statistically significant. Descriptive analyses were performed using SPSS 11.0 J software for Windows (SPSS Japan Inc., Tokyo, Japan). The abbreviations used in the present study are shown in Table 2.

Table 2
Abbreviations.

LF: low-frequency component of the power spectrum

HF: high-frequency component of the power spectrum

Ti: inspired time

 T_E : expired time

f_R: respiratory frequency

 $V_{\rm T}$: tidal volume

 $\dot{V}_{\rm E}$: expired ventilation

 \dot{V}_{0_2} : oxygen uptake

 \dot{V}_{CO_2} : carbon dioxide output

Spo2: percutaneous oxygen saturation

3. Results

3.1. Exercise times and work rate

All participants completed protocols without any adverse events or complications, and the reason for exercise stoppage was leg fatigue. The exercise times from the beginning of incremental exercise until the anaerobic threshold and endpoint were 6 min 12 ± 32 s and 10 min 2 ± 13 s with prolonged expiration breathing, and 5 min 56 ± 19 s and 9 min 42 ± 24 s with spontaneous breathing, respectively. The work rate at the anaerobic threshold and endpoint were 126.8 ± 10.6 and 213.6 ± 7.7 W with prolonged expiration breathing, and 109.6 ± 10.5 and 204.8 ± 6.8 W with spontaneous breathing, respectively. The exercise times and work rate at the anaerobic threshold and endpoint were significantly higher with prolonged expiration breathing than spontaneous breathing (P<0.05).

3.2. Respiratory responses

Changes in respiratory responses during incremental exercise are shown in Table 3. The f_R was significantly lower from the warm-up to the 75% point of the exercise period with prolonged expiration breathing than with spontaneous breathing (P<0.01). The V_T was significantly higher from the warm-up to the 75% point of the exercise period with prolonged expiration breathing than with spontaneous breathing (P<0.01). From the 50% point to the 75% point of the exercise period, \dot{V}_E was significantly lower with prolonged expiration breathing than with spontaneous breathing (P<0.01)

The $T_{\rm E}$ was significantly higher from the warm-up to the 75% point of the exercise period with prolonged expiration breathing than with spontaneous breathing (P<0.01). The $T_{\rm E}/T_{\rm I}$ was significantly higher in the warm-up and exercise periods with prolonged expiration breathing than with spontaneous breathing (P<0.01).

There was no significant difference in Sp_{O_2} throughout the study between the prolonged expiration and spontaneous breathing modes.

Changes in \dot{V}_E/\dot{V}_{O_2} and \dot{V}_E/\dot{V}_{CO_2} during incremental exercise are shown in Fig. 1. The \dot{V}_E/\dot{V}_{O_2} was significantly lower from the 60% point to the 90% point of the exercise period with prolonged expiration breathing than with spontaneous breathing (P<0.01). The \dot{V}_E/\dot{V}_{CO_2} was significantly lower from the 10% point to the 80% point of the exercise period with prolonged expiration breathing than with spontaneous breathing (P<0.01). The \dot{V}_E/\dot{V}_{CO_2} slope was 19.1 ± 2.9 with prolonged expiration breathing and 22.1 ± 4.4 with spontaneous breathing, and this difference was statistically significant (P<0.05).

3.3. Cardiopulmonary responses

Changes in heart rate, blood pressure and rate pressure product during incremental exercise are shown in Fig. 2. There was no

Table 3Changes in respiratory responses during incremental exercise.

	Breathing mode	Rest	Warm-up	Incremental exercise			
				25%	50%	75%	100% (endpoint)
f _R (breath/min)	Spontaneous breathing	18.1 (0.8)	24.0 (2.8)	22.7 (2.3)	24.7 (1.6)	27.9 (2.1)	35.8 (2.6)
	Prolonged expiration	17.3 (1.2)	10.1 (0.1) ^{††}	10.0 (0.2) ^{††}	11.1 (0.6) ^{††}	13.4 (3.4)††	29.0 (4.9)
V _T (L)	Spontaneous breathing	0.6 (0.0)	0.7 (0.0)	1.0 (0.0)	1.2 (0.0)	1.5 (0.0)	1.7 (0.0)
	Prolonged expiration	0.6 (0.0)	1.8 (0.2) ^{††}	2.0 (0.3) ^{††}	2.5 (0.2) ^{††}	2.8 (0.2) ^{††}	2.4 (0.4)
\dot{V}_{E} (L/min)	Spontaneous breathing	9.9 (0.3)	16.6 (0.7)	21.4 (1.6)	30.4 (1.6)	44.1 (3.1)	62.9 (5.7)
	Prolonged expiration	9.1 (0.5)	18.3 (2.2)	19.7 (2.1)	25.1 (1.5) ^{††}	33.8 (2.5)††	58.1 (6.9)
$T_{E}\left(s\right)$	Spontaneous breathing	2.1 (0.1)	1.6 (0.1)	1.6 (0.2)	1.4 (0.1)	1.2 (0.1)	0.9 (0.1)
	Prolonged expiration	2.2 (0.1)	3.9 (0.1) ^{††}	4.0 (0.1) ^{††}	3.7 (0.1) ^{††}	3.7 (0.3) ^{††}	1.7 (0.4)
$T_{\rm E}/T_{\rm I}$	Spontaneous breathing	1.5 (0.1)	1.4 (0.1)	1.3 (0.0)	1.2 (0.1)	1.2 (0.0)	1.1 (0.0)
	Prolonged expiration	1.4 (0.1)	1.9 (0.1) ^{††}	1.9 (0.2) ^{††}	1.9 (0.1) ^{††}	2.0 (0.1) ^{††}	1.9 (0.1) ^{††}
Sp_{O_2}	Spontaneous breathing	98.2 (0.4)	98.2 (0.4)	98.3 (0.4)	98.2 (0.4)	97.6 (0.4)	96.8 (0.4)
	Prolonged expiration	98.6 (0.2)	98.6 (0.2)	98.4 (0.3)	98.4 (0.2)	97.9 (0.4)	96.8 (0.4)

Data are presented as means (\pm standard error). f_R : respiratory frequency; V_T : tidal volume; \dot{V}_E : expired ventilation; T_E : expired time; T_L : inspired time; Sp_{0_2} : percutaneous oxygen saturation. The results of the two-way analysis of variance for repeated measures were as follows: interaction between time courses and breathing modes for f_R (F=2.2, P<0.05), V_T (F=2.3, P<0.05), V_T (F=2.3, P<0.01) and T_E/T_L (F=3.1, P<0.01), and effects of time courses and breathing modes for \dot{V}_E (time courses: F=51.5, P<0.01, and breathing modes: F=14.4, P<0.01).

^{††} P<0.01 vs. spontaneous breathing

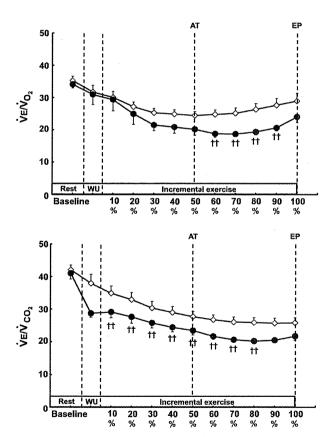


Fig. 1. Changes in V_E/V_{O_2} and V_E/V_{CO_2} during incremental exercise. Data are presented as means \pm standard error, closed circle: prolonged expiration breathing, open diamond: spontaneous breathing, $^{\dagger\dagger}P<0.01$ vs. spontaneous breathing. V_E : expired respiration; V_{O_2} : oxygen uptake; V_{CO_2} : carbon dioxide emission; WU: warmup; AT: anaerobic threshold; EP: endpoint. The results of the two-way analysis of variance for repeated measures were as follows: effects of time courses and breathing modes for V_E/V_{O_2} (time courses: F=10.0, P<0.01, and breathing modes: F=27.4, P<0.01) and V_E/V_{CO_2} (time courses: F=24.0, P<0.01, and breathing modes: F=58.2, P<0.01).

significant difference in heart rate throughout the study between prolonged expiration and spontaneous breathing modes. The systolic blood pressure was significantly lower from the 20% point of the exercise period to the endpoint with prolonged expiration breathing than with spontaneous breathing (P<0.01). The diastolic blood pressure was significantly lower from the 30% point of the exercise period to the endpoint with prolonged expiration breathing than with spontaneous breathing (P<0.05). The rate pressure product was significantly lower from the 20% point of the exercise period to the endpoint with prolonged expiration breathing than with spontaneous breathing (P<0.01).

Changes in \dot{V}_{O_2} and \dot{V}_{O_2} /work rate during incremental exercise are shown in Fig. 3. The \dot{V}_{0_2} at the endpoint were significantly higher with prolonged expiration breathing than with spontaneous breathing (P<0.05). The anaerobic threshold corresponded to 50.9 ± 8.3% of the exercise period with prolonged expiration breathing, and 50.9 ± 2.9% of that with spontaneous breathing, showing no significant difference between breathing modes. The respiratory compensation point occurred at $80.6 \pm 8.2\%$ of the exercise period with prolonged expiration breathing and $78.5 \pm 6.3\%$ with spontaneous breathing, showing no significant difference between breathing modes. The $\dot{V}_{\rm O_2}/{\rm work}$ rate was significantly higher from the 70% point of the exercise period to the endpoint with prolonged expiration breathing than with spontaneous breathing (P < 0.05). The delta V_{0_2} /delta work rate was 10.5 ± 0.4 mL/min/W with prolonged expiration breathing and 9.4 ± 0.5 mL/min/W with spontaneous breathing, and the difference between the two breathing modes was statistically significant (P < 0.05).

3.4. Heart rate variability and blood pressure variability

Changes in LF, HF and LF/HF of heart rate variability during incremental exercise are shown in Fig. 4. There was no significant differences in LF throughout the study between prolonged expiration and spontaneous breathing modes. The HF was significantly higher from the warm-up to the 50% point of the exercise period with prolonged expiration breathing than with spontaneous breathing (P<0.01). The LF/HF was significantly lower from the warm-up to the 20% point of the exercise period with prolonged expiration breathing than with spontaneous breathing (P<0.05).



T. Matsumoto et al. / Respiratory Physiology & Neurobiology 178 (2011) 275-282

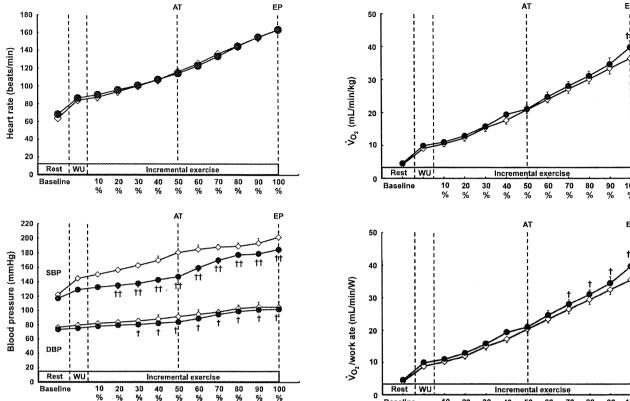


Fig. 3. Changes in \dot{V}_{0_2} and $\dot{V}_{0_2}/\text{work}$ rate during incremental exercise. Data are presented as means ± standard error, closed circle: prolonged expiration breathing, open diamond: spontaneous breathing, †P<0.05 vs. spontaneous breathing. \dot{V}_{0_2} : oxygen uptake; WU: warm-up; AT: anaerobic threshold; EP: endpoint. The results of the two-way analysis of variance for repeated measures were as follows: effects of time courses and breathing modes for \dot{V}_{0_2} (time courses: F = 157.2, P < 0.01, and breathing modes: F=4.4, P<0.01) and \dot{V}_{0_2} /work rate (time courses: F=156.5, P < 0.01, and breathing modes: F = 9.3, P < 0.01).

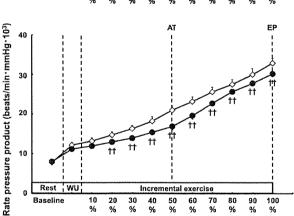


Fig. 2. Changes in heart rate, blood pressure and rate pressure product during incremental exercise. Data are presented as means \pm standard error, closed circle: prolonged expiration breathing, open diamond: spontaneous breathing, †P<0.05 and #P<0.01 vs. spontaneous breathing. SBP: systolic blood pressure; DBP: diastolic blood pressure; WU: warm-up; AT: anaerobic threshold; EP: endpoint. The results of the two-way analysis of variance for repeated measures were as follows: effect of time courses for heart rate (F = 147.6, P < 0.01), and effects of time courses and breathing modes for SBP (time courses: F = 50.7, P < 0.01, and breathing modes: F = 110.5, P < 0.01), DBP (time courses: F = 53.2, P < 0.01, and breathing modes: F = 31.7, P < 0.01) and rate pressure product (time courses: F=154.8, P<0.01, and breathing modes: F = 40.8, P < 0.01).

Changes in LF, HF and LF/HF of blood pressure variability during incremental exercise are shown in Fig. 5. The LF was significantly lower from the 50% point of the exercise period to the endpoint with prolonged expiration breathing than with spontaneous breathing (P < 0.05 and P < 0.01, respectively). There was no significant differences in HF throughout the study between prolonged expiration and spontaneous breathing modes. The LF/HF was significantly lower from the 80% point of the exercise period to the endpoint with prolonged expiration breathing than with spontaneous breathing (P < 0.05).

3.5. Rating of perceive exertion

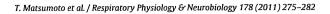
Raseline

The respective ratings of perceived exertion at the anaerobic threshold and endpoint were 11.4 ± 0.7 and 16.6 ± 0.7 with prolonged expiration breathing, and 11.2 ± 0.8 and 16.8 ± 0.7 with spontaneous breathing. There were no significant differences in rating of perceived exertion at the anaerobic threshold or endpoint between the prolonged expiration and spontaneous breathing modes.

4. Discussion

The major findings of this study are that prolonged expiration breathing improves ventilation efficiency, suppresses sympathetic nervous activity and activates parasympathetic nervous activity during incremental exercise. Furthermore, prolonged expiration breathing may suppress exercise-induced increases in myocardial \dot{V}_{0_2} . Because no significant differences were observed in Sp_{0_2} during exercise between the two breathing modes, we believe that hypoxemia was not induced by the prolonged expiration breathing technique used in this study.





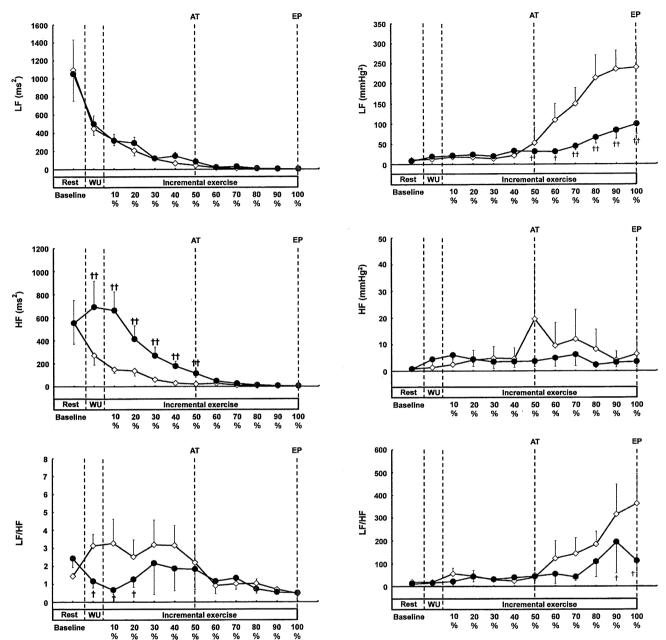


Fig. 4. Changes in LF, HF and LF/HF of heart rate variability during incremental exercise. Data are presented as means \pm standard error, closed circle: prolonged expiration breathing, open diamond: spontaneous breathing, $\dagger P < 0.05$ and $\dagger P < 0.05$ frequency component; WU: warm-up; AT: anaerobic threshold; EP: endpoint. The results of the two-way analysis of variance for repeated measures were as follows: effect of time courses for LF(F = 15.8, P < 0.01) and LF/HF(F = 2.0, P < 0.05), and interaction between time courses and breathing modes for HF(F = 2.1, P < 0.05).

Fig. 5. Changes in LF, HF and LF/HF of blood pressure variability during incremental exercise. Data are presented as means \pm standard error, closed circle: prolonged expiration breathing, open diamond: spontaneous breathing, †P < 0.05 and †P < 0.01 vs. spontaneous breathing mode. LF: low-frequency component; HF: high-frequency component; WU: warm-up; AT: anaerobic threshold; EP: endpoint. The results of the two-way analysis of variance for repeated measures were as follows: interaction between time courses and breathing modes for LF (F = 3.7, P < 0.01), and effects of time courses and breathing modes for LF/HF (time courses: F = 4.2, P < 0.05, and breathing modes: F = 5.3, P < 0.05).

With prolonged expiration breathing, the participants were able to control their respiration at 10 breaths/min from the warm-up to the 75% point of the exercise period and to maintain a $T_{\rm E}/T_{\rm I}$ of approximately 2 from the warm-up until the end of the to the incremental exercise. It is generally known that $\dot{V}_{\rm E}$ rises as $V_{\rm T}$ increases with exercise intensity below anaerobic threshold during incremental exercise, and the $\dot{V}_{\rm E}$ increase depends on an increased $f_{\rm R}$ when exercise intensity exceeds anaerobic threshold (Jones and Doust, 1998; Neder et al., 2001, 2003). The present results demon-

strate that the $\dot{V}_{\rm E}$ increase observed with prolonged expiration breathing was controlled by an increase in $V_{\rm T}$ until the duration of exercise reached the 75% point of the exercise period beyond the time of anaerobic threshold. Furthermore, prolonged expiration breathing was shown to provide more efficient ventilation, due to the lower $\dot{V}_{\rm E}$, $\dot{V}_{\rm E}/\dot{V}_{\rm O_2}$, $\dot{V}_{\rm E}/\dot{V}_{\rm CO_2}$ and $\dot{V}_{\rm E}/\dot{V}_{\rm CO_2}$ slope, improved oxygen uptake and increased exercise efficiency due to higher $\dot{V}_{\rm O_2}$ and delta $\dot{V}_{\rm O_2}/{\rm delta}$ work rate, as compared with spontaneous breathing mode. The improved ventilation efficiency may be attributable

to the decreased f_R and the increased V_T , which reportedly diminish dead space ventilation and increase alveolar ventilation (Giardino et al., 2003; Thin et al., 2004). Furthermore, a significant negative correlation has already been documented between peak \dot{V}_{O_2} and $\dot{V}_{\rm E}/\dot{V}_{\rm CO_2}$ slope during exercise (Chua et al., 1997; Clark et al., 1997). The present findings indicate that prolonged expiration breathing, which decreases f_R and increases V_T , improves the efficiency of both ventilation and exercise. However, the $\dot{V}_{0_2}/\text{work}$ rate with prolonged expiration breathing was higher at high intensities of 70% or above during incremental exercise as compared to that with spontaneous breathing. Although exercise efficiency was diminished at high intensity by prolonged expiration breathing as compared to spontaneous breathing, the V_{0_2} /work rate might have been higher with prolonged expiration breathing due to improved uptake of $\dot{V}_{\mathrm{O_{2}}}$ at high intensity. Nevertheless, $\dot{V}_{\mathrm{O_{2}}}$ and the work rate at high intensity were high with prolonged expiration breathing because $\dot{V}_{\rm E}/\dot{V}_{\rm O_2}$, $\dot{V}_{\rm E}/\dot{V}_{\rm CO_2}$ and $\dot{V}_{\rm E}/\dot{V}_{\rm CO_2}$ slope, indices of ventilation efficiency, were improved by prolonged expiration breathing as compared to spontaneous breathing. The \dot{V}_{O_2} and work rate, indices of aerobic capacity, appeared to improve with prolonged expiration breathing as compared to spontaneous breathing.

We examined cardiovascular responses with prolonged expiration breathing and found that blood pressure and rate pressure product were significantly lower during exercise period with prolonged expiration breathing than with spontaneous breathing. However, heart rate did not differ significantly between the two breathing modes. Therefore, prolonged expiration breathing was shown to suppress excessive elevations of blood pressure and rate pressure product during incremental exercise, and it might have suppressed the increase in myocardial \dot{V}_{0_2} . Our analysis of autonomic nervous activity revealed that HF in heart rate variability was higher and LF in blood pressure variability was lower during incremental exercise with prolonged expiration breathing than with spontaneous breathing. Therefore, we conclude that prolonged expiration breathing contributes to decreases in blood pressure and rate pressure product via the activation of parasympathetic nervous activity and the suppression of sympathetic nervous activity. Conversely, LF/HF in heart rate and blood pressure variability were significantly lower during exercise with prolonged expiration breathing than with spontaneous breathing, although LF in heart rate variability and HF in blood pressure variability did not differ significantly between the two breathing modes. Our findings suggest that prolonged expiration breathing may improve autonomic balance during incremental exercise as compared to spontaneous breathing (Task Force of the European Society of Cardiology and the North American Society of Pacing and Electrophysiology, 1996; Baselli et al., 1986; Laitinen et al., 1999).

Parasympathetic nervous activity is known to be suppressed soon after the initiation of incremental exercise, whereas sympathetic nervous activity shows no significant change at an exercise intensity below anaerobic threshold (Goldsmith et al., 2000; Rosenwinkel et al., 2001). When exercise intensity exceeds anaerobic threshold, parasympathetic nervous activity decreases markedly while sympathetic nervous activity begins to increase according to the workload increment (Goldsmith et al., 2000; Rosenwinkel et al., 2001). However, our results demonstrate that prolonged expiration breathing suppresses both the decrease of parasympathetic nervous activity after initiation of incremental exercise and the increase of sympathetic nervous activity at exercise intensity exceeding anaerobic threshold. Autonomic nervous activity is known to be synchronized with the central respiratory drive (Barman and Gebber, 1976; Preiss et al., 1975; Spyer, 1990). Thus, parasympathetic nervous activity decreases during inspiration and increases during expiration (Katona and Jih, 1975). In contrast, sympathetic nervous activity decreases during expiration (Seals et al., 1993). The f_R decrease and V_T increase also reportedly activate parasympathetic nervous activity (Hayano et al., 1994a,b) and suppress sympathetic nervous activity (Hayano et al., 1994a,b). Therefore, prolonged expiration breathing, which involves a decrease of f_R and an increase of V_T , appears to effectively improve the balance between parasympathetic and sympathetic nervous activities (Berntson et al., 1993; Daly, 1985; Yasuma and Hayano, 2004).

Ventilation efficiency was improved and aerobic capacity was enhanced by incorporating prolonged expiration breathing, which was examined in this study, during incremental exercise. Prolonged expiration breathing also suppressed excessive increases in blood pressure by activating parasympathetic nervous activity and inhibiting sympathetic nervous activity during incremental exercise. Therefore, exercise with prolonged expiration breathing may be safer and more effective, not only in healthy young adults but also in older individuals, than similar activity with spontaneous breathing. The effects of prolonged expiration breathing on autonomic nervous activity and cardiopulmonary responses in elderly subjects will be elucidated in future studies.

The present study employed frequency components, which are common markers of heart rate variability and blood pressure variability, in the analysis of autonomic nervous activity; however, these markers are indirect indicators of autonomic nervous activity. Therefore, the activity evaluated based on heart rate variability and blood pressure variability may limit the reliability and validity of research results. The use of direct indicators of the activity such as muscle sympathetic nerve activity (Goso et al., 2001), plasma epinephrine and norepinephrine concentrations (Kasahara et al., 2006), and baroreflex sensitivity (Bernardi et al., 2002) is worth exploring as evaluation markers in future research in order to improve the reliability and validity of analytical results of autonomic nervous activity monitored during breathing in patterns tested in the present study.

In the preceding studies that investigated the differences in cardiopulmonary responses during exercise between upright and recumbent bicycle ergometers, rate pressure product and rating of perceived exertion were higher at low intensity, whereas blood pressure, $\dot{V}_{\rm E}$, and $\dot{V}_{\rm E}/\dot{V}_{\rm CO_2}$ were higher from low to high intensity when a recumbent bicycle ergometer was used rather than an upright bicycle ergometer (Quinn et al., 1995; Saitoh et al., 2005). The rate pressure product and rating of perceived exertion might have been lower at low intensity, whereas blood pressure, $\dot{V}_{\rm E}$ and $\dot{V}_{\rm E}/\dot{V}_{\rm CO_2}$ might have been lower from low to high intensity, if the present study was designed using an upright bicycle ergometer instead of a recumbent one.

In the present study, striking effects of prolonged expiration breathing included the suppression of increases in blood pressure associated with decreased sympathetic and increased parasympathetic nervous activities during incremental exercise. In addition, prolonged expiration breathing enhanced the efficiency of both ventilation and exercise, and it might have suppressed the exercise-induced increase in myocardial $\dot{V}_{\rm O_2}$ in healthy young male volunteers.

Acknowledgment

This study was supported in part by a grant-in-aid for scientific research (grant no. 20500463) from the Ministry of Education, Science, and Culture in Japan.

References

Barman, S.M., Gebber, G.L., 1976. Basis for synchronization of sympathetic and phrenic nerve discharges. Am. J. Physiol. 231, 1601–1607.

- Bartels, M.N., Jelic, S., Ngai, P., Gates, G., Newandee, D., Reisman, S.S., Basner, R.C., De Meersman, R.E., 2004. The effect of ventilation on spectral analysis of heart rate and blood pressure variability during exercise. Respir. Physiol. Neurobiol. 144,
- Baselli, G., Cerutti, S., Civardi, S., Liberati, D., Lombardi, F., Malliani, A., Pagani, M., 1986. Spectral and cross-spectral analysis of heart rate and arterial blood pressure variability signals. Comput. Biomed. Res. 19, 520-534.
- Bernardi, L., Spadacini, G., Bellwon, J., Hajric, R., Roskamm, H., Frey, A.W., 1998. Effect of breathing rate on oxygen saturation and exercise performance in chronic heart failure. Lancet 351, 1308-1311.
- Bernardi, L., Porta, C., Spicuzza, L., Bellwon, J., Spadacini, G., Frey, A.W., Yeung, L.Y., Sanderson, J.E., Pedretti, R., Tramarin, R., 2002. Slow breathing increases arterial baroreflex sensitivity in patients with chronic heart failure. Circulation 105,
- Berntson, G.G., Cacioppo, J.T., Quigley, K.S., 1993. Respiratory sinus arrhythmia: autonomic origins, physiological mechanisms, and psychophysiological implications. Psychophysiology 30, 183-196.
- Bloomfield, D.M., Magnano, A., Bigger Jr., J.T., Rivadeneira, H., Parides, M., Steinman, R.C., 2001. Comparison of spontaneous vs. metronome-guided breathing on assessment of vagal modulation using RR variability. Am. J. Physiol. Heart Circ. Physiol. 280, H1145–H1150.
- Chua, T.P., Ponikowski, P., Harrington, D., Anker, S.D., Webb-Peploe, K., Clark, A.L., Poole-Wilson, P.A., Coats, A.J., 1997. Clinical correlates and prognostic signifi-cance of the ventilatory response to exercise in chronic heart failure. J. Am. Coll. Cardiol. 29, 1585–1590.
- Clark, A.L., Volterrani, M., Swan, J.W., Coats, A.J., 1997. The increased ventilatory response to exercise in chronic heart failure; relation to pulmonary pathology.
- Cottin, F., Papelier, Y., Escourrou, P., 1999. Effects of exercise load and breathing frequency on heart rate and blood pressure variability during dynamic exercise. Int. J. Sports Med. 20, 232-238.
- Daly, M. de B., 1985. Interactions between respiration and circulation. In: Handbook of Physiology. The Respiratory System. Control of Breathing. Am. Physiol. Soc., Bethesda, pp. 529-594.
- Giardino, N.D., Glenny, R.W., Borson, S., Chan, L., 2003. Respiratory sinus arrhythmia is associated with efficiency of pulmonary gas exchange in healthy humans. Am. J. Physiol. Heart Circ. Physiol. 284, H1585–H1591.
- Gobel, F.L., Norstrom, L.A., Nelson, R.R., Jorgensen, C.R., Wang, Y., 1978. The ratepressure product as an index of myocardial oxygen consumption during exercise in patients with angina pectoris. Circulation 57, 549–556.
- Goldsmith, R.L., Bloomfield, D.M., Rosenwinkel, E.T., 2000. Exercise and autonomic
- function. Coron. Artery Dis. 11, 129–135. Goso, Y., Asanoi, H., Ishise, H., Kameyama, T., Hirai, T., Nozawa, T., Takashima, S., Umeno, K., Inoue, H., 2001. Respiratory modulation of muscle sympathetic nerve
- activity in patients with chronic heart failure. Circulation 104, 418–423.
 Hayano, J., Mukai, S., Sakakibara, M., Okada, A., Takata, K., Fujinami, T., 1994a. Effects of respiratory interval on vagal modulation of heart rate. Am. J. Physiol. 267, H33-H40.
- Hayano, J., Taylor, J.A., Mukai, S., Okada, A., Watanabe, Y., Takata, K., Fuji-nami, T., 1994b. Assessment of frequency shifts in R-R interval variability and respiration with complex demodulation. J. Appl. Physiol. 77, 2879-2888.
- Jones, A.M., Doust, J.H., 1998. Assessment of the lactate and ventilatory thresholds by breathing frequency in runners. J. Sports Sci. 16, 667-675.
- Kasahara, Y., Izawa, K., Omiya, K., Osada, N., Watanabe, S., Saitoh, M., Matsunaga, A., Masuda, T., 2006. Influence of autonomic nervous dysfunction characterizing effect of diabetes mellitus on heart rate response and exercise capacity in patients undergoing cardiac rehabilitation for acute myocardial infarction. Circ. J. 70, 1017–1025.
- Katona, P.G., Jih, F., 1975. Respiratory sinus arrhythmia: noninvasive measure of parasympathetic cardiac control. J. Appl. Physiol. 39, 801-805.
- Kelsey, M., 2001. Health and fitness assessment. In: Roitman, J.L. (Ed.), ACSM's Resource Manual for Guidelines for Exercise Testing and Prescription., fourth ed. Lippincott Williams and Wilkins, Baltimore, pp. 353-407.
- Koike, A., Itoh, H., Kato, M., Sawada, H., Akizawa, T., Fu, L.T., Watanabe, H., 2002. Prognostic power of ventilatory responses during submaximal exercise in patients with chronic heart disease. Chest 121, 1581–1588.

- Laitinen, T., Hartikainen, J., Niskanen, L., Geelen, G., Länsimies, E., 1999. Sympathovagal balance is major determinant of short-term blood pressure variability in healthy subjects. Am. J. Physiol. 276, H1245–H1252.
- Matsumoto, T., Matsunaga, A., Hara, M., Saitoh, M., Yonezawa, R., Ishii, A., Kutsuna, T., Yamamoto, K., Masuda, T., 2008. Effects of the breathing mode characterized by prolonged expiration on respiration and cardiovascular responses and autonomic nervous activity during the exercise. Jpn. J. Phys. Fitness Sports Med. 57, 315-326
- Matsunaga, A., Masuda, T., Ogura, M.N., Saitoh, M., Kasahara, Y., Iwamura, T., Yamaoka-Tojo, M., Sato, K., Izumi, T., 2004. Adaptation to low-intensity exercise on a cycle ergometer by patients with acute myocardial infarction undergoing
- phase I cardiac rehabilitation. Circ. J. 68, 938–945.

 Neder, J.A., Nery, L.E., Peres, C., Whipp, B.J., 2001. Reference values for dynamic responses to incremental cycle ergometry in males and females aged 20 to 80. Am. J. Respir. Crit. Care Med. 164, 1481-1486.
- Neder, J.A., Dal Corso, S., Malaguti, C., Reis, S., De Fuccio, M.B., Schmidt, H., Fuld, J.P., Nery, L.E., 2003. The pattern and timing of breathing during incremental exercise: a normative study. Eur. Respir. J. 21, 530–538.
- Nelson, R.R., Gobel, F.L., Jorgensen, C.R., Wang, K., Wang, Y., Taylor, H.L., 1974. Hemodynamic predictors of myocardial oxygen consumption during static and dynamic exercise. Circulation 50, 1179–1189.
- Noble, B.J., Borg, G.A., Jacobs, I., Ceci, R., Kaiser, P., 1983. A category-ratio perceived exertion scale: relationship to blood and muscle lactates and heart rate. Med. Sci. Sports Exerc. 15, 523–528.
- Pöyhönen, M., Syväoja, S., Hartikainen, J., Ruokonen, E., Takala, J., 2004. The effect of carbon dioxide, respiratory rate and tidal volume on human heart rate variability. Acta Anaesthesiol. Scand. 48, 93–101.
- Preiss, G., Kirchner, F., Polosa, C., 1975. Patterning of sympathetic preganglionic
- neuron firing by the central respiratory drive. Brain. Res. 87, 363–374. Quinn, T., Smith, S., Vroman, N., Kertzer, R., Olney, W., 1995. Physical responses of cardiac patients to supine, recumbent, and upright cycle ergometry. Arch. Phys. Med. Rehabil. 76, 257-261.
- Rosenwinkel, E.T., Bloomfield, D.M., Arwady, M.A., Goldsmith, R.L., 2001. Exercise and autonomic function in health and cardiovascular disease, Cardiol, Clin, 19.
- Saitoh, M., Matsunaga, A., Kamiya, K., Ogura, M.N., Sakamoto, J., Yonezawa, R., Kasahara, Y., Watanabe, H., Masuda, T., 2005, Comparison of cardiovascular responses between upright and recumbent cycle ergometers in healthy young volunteers performing low-intensity exercise: assessment of reliability of the oxygen uptake calculated by using the ACSM metabolic equation. Arch. Phys. Med. Rehabil. 86, 1024–1029.
- Sanderson, J.E., Yeung, L.Y., Yeung, D.T., Kay, R.L., Tomlinson, B., Critchley, J.A., Woo, K.S., Bernardi, L., 1996. Impact of changes in respiratory frequency and posture on power spectral analysis of heart rate and systolic blood pressure variability
- in normal subjects and patients with heart failure. Clin. Sci. (Lond.) 91, 35-43.

 Seals, D.R., Suwarno, N.O., Joyner, M.J., Iber, C., Copeland, J.G., Dempsey, J.A., 1993.

 Respiratory modulation of muscle sympathetic nerve activity in intact and lung denervated humans. Circ. Res. 72, 440-454.
- Spyer, K.M., 1990. The central nervous organization of reflex circulatory control. In: Loewy, A.D., Spyer, K.M. (Eds.), Central Regulation of Autonomic Functions. Oxford University Press, New York, pp. 68-188.
- Task Force of the European Society of Cardiology and the North American Society of Pacing and Electrophysiology, 1996. Heart rate variability: standards of measurement, physiological interpretation and clinical use. Circulation 93, 1043-1065.
- Thin, A.G., Dodd, I.D., Gallagher, C.G., Fitzgerald, M.X., Mcloughlin, P., 2004, Effect of respiratory rate on airway deadspace ventilation during exercise in cystic fibrosis. Respir. Med. 98, 1063–1070.
- Toyofuku, M., Takaki, H., Sugimachi, M., Kawada, T., Goto, Y., Sunagawa, K., 2003. Reduced oxygen uptake increase to work rate increment (DeltaVO₂/DeltaWR) is predictable by VO₂ response to constant work rate exercise in patients with chronic heart failure. Eur. J. Appl. Physiol. 90, 76–82. Wasserman, K., Hansen, J.E., Sue, D.Y., Stringer, W.W., Whipp, B.J., 2005. Principles of
- Exercise Testing and Interpretation, fourth ed. Lippincott Williams and Wilkins, Philadelphia.
- Yasuma, F., Hayano, J., 2004. Respiratory sinus arrhythmia: why does the heartbeat synchronize with respiratory rhythm? Chest 125, 683-690.